

「子どものように」

マルコの福音書 10:13~16

はじめに

今日のメッセージは、ある意味で「子ども向け」のメッセージとなります。前回の箇所は、イエシュアが弟子たちを伴い「ユダヤ地方とヨルダンの川向こう」に行かれ、そこへイエシュアを試すためにパリサイ人たちがやって来て、イエシュアと問答をするという出来事でした。そして今回もまたある人々がイエシュアのみもとにやって来ます。しかし前回とは打って変わり、無学で幼い「子どもたち」の登場です。当時の社会では、女性と子どもは人数に数えられない、と言われるほどに価値の低いとされる存在でした。前回のパリサイ人たちとは全く対照的な存在と言えるでしょう。そしてこれは次回の話になるのですが、この子どもたちの次に、また別の存在がやって来ます。それは多くの財産を持っている「お金持ち」と呼ばれる人です。イエシュアのもとにやって来た「パリサイ人」、「子どもたち」、そして「お金持ち」、これら三つの異なるタイプの存在の中で、やがてイエシュアがこの地上にお建てになる「神の国」の民として相応しいのは、今回取り上げる「子どもたち」のような者であるとイエシュアは断言しておられます。だからと言って「神の国」に年齢制限があるわけではありません。今日の内容の中に、ここに記されている子どもたちの様子と、またイエシュアの御言葉の中に「神の国」とは、またその民とはどのようなものであるかが表わされているということです。というわけで今日は「神の国」を受け入れる、「子ども」のような人についてのメッセージとなっています。

1. 連れて来られる

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:13 さて、イエスに触れていただこうと、人々が子どもたちを連れて来た。ところが弟子たちは彼らを叱った。

10:14 イエスはそれを見て、憤って弟子たちに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。」

まずイエシュアのみもとに「人々が子どもたちを連れて来た」とあります。子どもたちが自分の意志で来たわけではありません。本人たちの意志とは関係なく、いわば勝手に「連れて来」られたのです。ここに使われているポー(בָּאוּ)というヘブル語は本来、「人々が」ではなく、「神が」連れて来るという意味の言葉なのです。

創世記【新改訳 2017】

2:19 神である【主】は、その土地の土で、あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造って、人のところに連れて来られた。人がそれを何と呼ぶかをご覧になるためであった。人がそれを呼ぶと、何であれ、それがその生き物の名となった。

これはエデンの園に置かれた人、アダムに名を付けさせるために「あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥」を「神は、…連れて来られた。」という場面です。ここに聖書で最初のポーが使われており、この言葉は本来、神によって集められる、その名を呼ばれるものの存在を指し示す言葉であると考えられ、イエシュアのみもとにポー「連れて来」られた子どもたちの中に、神によってイエシュアのみもとに集められる、その名を呼ばれる、すなわち名指して選ばれる者が「神の国」の民であるということが表わされていると考えられます。つまり「神の国」に入る神の選び、救いとは、人の意志決定によるものではなく、ただ神の御心による、神の側からの一方的な選びによるものであるということです。

それはまた人の持つ能力や知識とも何ら関係がありません。律法の専門家で人々の指導者、教師であったパリサイ人たちではなく、知恵も知識も力もない小さな幼い子どもたちを指して、イエシュアは「神の国はこのような者たちのもの」であると語っておられることがその事実を表しています。つまり「神の国」に入る、救われるために人の側で満たさなければならない条件も、差し出さなければならない代価もないのだということです。こういう言い方をすると、救われる人には「神を信じる信仰」「神を求める心」がなければならないのではないかと思われる方もあるでしょう。しかしその救われる人の持っているであろう信仰も、神を求める心もまた、神がお選びになった者に、神がお与えになったものなのです。

2. 触れていただく

ではこの「子どもたち」について、さらに詳しく見てまいりましょう。子どもたちはなぜイエシュアのみもとに連れて来られたのでしょうか。それは「触れていただく」くためであったとあります。実はこれは非常に稀なケースなのです。なぜなら福音書に記された、イエシュアのみもとに来る人の多くは、病いや悪霊などによる悩みや苦しみを抱え、その解決、癒しの奇蹟を求めてやって来ていたからです。あるいは先のパリサイ人たちのようにイエシュアを試みる、あるいは質問するために近づいて来ました。ところがこの子どもたちの目的、子どもたちが連れて来られた目的はそれらとは異なっていました。ただ「触れていただく」きたかったということなのです。特に病いなどの問題があった子どもたちではなかったようです。何しろ弟子たちが思わず叱りつけてしまうほどですから、実に元気でわんぱくな子どもらしい子どもたちであったと思われる。しかしこのイエシュアに「触れていただく」くことこそが、「神の国」の民とされるためになくてはならないことなのです。ヘブル語で「触れる、打つ、打たれる」ことをナーガ(נָגַ)と言いますが、この言葉は本来、このように用いられました。

創世記【新改訳 2017】

3:3 しかし、園の中央にある木の实については、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と神は仰せられました。』

これは神が人に食べてはならないとお命じになった「園の中央にある木の实」善悪の知識の木についてのものですが、ここに聖書で最初のナーガ「触れ」るという言葉があります。そしてそれは「触れ」た者は「死ぬ」という事実を指し示しています。ですから子どもたちがイエシュアに「触れていただく」くという出来事には、イエシュアがナーガ「打たれる」そして「死ぬ」ということが表わされていると考えられます。イエシュアが死ぬということ、それはもちろん、十字架による、罪の身代わり、贖いとしての死を意味します。つまり「神の国」の民はみなイエシュアの十字架の死によってその罪が贖われた、赦された者

であるということがここには表されているのだと思われます。人が「神の国」の民となるために必要なこと、それは病気が癒されることでも、人生に起こる様々な問題が解決されることでもありません。ましてや努力して自分で自分を高めることでもありません。それは神に選ばれた者であるということ、そしてこのナーガの本来の意味に表されているように、イエシュアに「死んでいただく」ということ、すなわちイエシュアの十字架の死によって罪を贖われ、赦された者となるということなのです。もし自分の罪がイエシュアの十字架の死によって赦された、贖われたと信じるなら、その信仰に立つなら、その人はその信仰が神から与えられた者であり、神に選ばれた人であり「神の国」の民となるべき人なのです。しかしもし信じられない、その信仰がないと思うなら、どうしますか？そのままいいですか？それとも「お与えください」とイエシュアの御名によって神に祈り求めますか？求める者は与えられます。そしてその求める思いさえも、神がその人にお与えになったものなのです。

3. 叱る

イエシュアにただ触れていただくことと連れてこられた子どもたちでしたが、弟子たちが「叱っ」て、これを退けようとしています。この「叱る」という意味のヘブル語はガーアル(גָּאַר)というのですが、この言葉は初め、以下のような出来事の中で用いられました。

創世記【新改訳 2017】

37:9 再びヨセフは別の夢を見て、それを兄たちに話した。彼は、「また夢を見ました。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいました」と言った。

37:10 ヨセフが父や兄たちに話すと、父は彼を叱って言った。「いったい何なのだ、おまえの見た夢は。私や、おまえの母さん、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地に伏しておまえを拝むというのか。」

ヨセフが見た夢、それは後に起こることを神があらかじめ彼に啓示された、神のご計画でした。これを聞いた父ヤコブはヨセフを「叱って言った」とあり、ここに聖書で最初のガーアルがあります。叱りはしたものの、ヤコブはその夢の意味を見事に解き明かしています。しかしそれをすぐには神のご計画として理解し、受け入れることができず、これは「いったい何なのだ」と言っています。ヨセフの見た夢は後に創世記 41:43、そして 42:6 で成就しますが、しかしこれもまた終わりの日に起こる神のご計画の「型」たとえであり、究極的には「ヨセフの子（ルカ 3:23、4:22、ヨハネ 1:45、6:42）」と呼ばれたナザレ人イエシュア、イスラエルのメシアであるこの御方の御前に、イスラエルはもとよりすべてのものが膝をかがめ、伏し拝むようになる、聞き従うようになる（ピリピ 2:10～11）という「神の国」のご計画の完成を指し示したものであると考えられます。ですからイエシュアのみもとに連れて来られた子どもたちに対して「叱った」という弟子たちのとったこの行為は、イエシュアの目には、神のご計画に対する拒絶、反抗と見えたと考えられます。

4. 憤る

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:14 イエスはそれを見て、憤って弟子たちに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。」

イエシュアは「**憤って弟子たちに言われ**」ました。イエシュアのこの「憤り」、怒りは相当なものであったと思われます。なぜならここに使われている「憤る」ラーア(רעע)というヘブル語は本来、「彼らの罪はきわめて重い(創世記 18:20)」と言われ、天からの硫黄と火によって滅ぼされた、ソドムとゴモラの人々、彼らが行ったその罪「**悪いこと**」(創世記 19:7)を指し示す言葉だからです。神のご計画を拒絶する者、反抗する者は、当然のことながら「神の国」に入ることはできません。そしてそれは同時に、このソドムとゴモラの人々のように、神によって滅ぼされることをも意味します。

弟子たちの制止が入りましたが、「**子どもたちを、わたしのところに来させなさい。**」というイエシュアの一言がそれを打ち消して、子どもたちが連れて来られます。何気ないこの状況も非常に重要です。初めこの子どもたちをイエシュアのみもとに連れて行こうとしたのは「**人々**」でしたが、それを弟子たちが「**邪魔**」をしたため、「**子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。**」というイエシュアの御言葉が子どもたちをみもとに引き寄せた形となりました。このように、「神の国」の民とは、人の、人々の意志によってではなく、イエシュアによって、そのご命令によって来させる、呼び集められる者たちなのです。その事実が、神のご計画の「**型**」が、この何気ない状況の中には表されているのです。ですからイエシュアの言われた「**このような者たち**」とはすなわち、「**わたしのところに来させなさい**」と言われたイエシュアの御言葉、そのご命令によって集められる者たちのことであると言え、そして「**神の国はこのような者たちのもの**」ということなのです。どのような状況、どのような形であれ、人は自分の意志や力で神のみもとに行くことはできません。イエス・キリスト、メシアであるイエシュアを通して、この御方によってのみ、それが可能となるのです。

5. 受け入れる

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:15 まことに、あなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」

「**神の国**」に入る条件、それは「**子どものように神の国を受け入れる者**」です。「**子どものように**」とはすなわち、神に選ばれ、イエシュアによって、そのみもとに呼び集められる者のことです。私たちは今、イエシュアの御言葉を聞くためにこの教会に集められていますが、これもまたやがて実現する「**神の国**」の「**型**」です。ではどのように実現、成就するのでしょうか、それは「**神の国を受け入れる**」ことによって成就します。この「**受け入れる**」という意味のヘブル語はカーヴァル(קבל)と言い、本来は以下のような御言葉の中で用いられました。

出エジプト記【新改訳 2017】

26:1 **幕屋**を十枚の幕で造らなければならない。幕は、撚り糸で織った亜麻布、青、紫、緋色の撚り糸を用い、意匠を凝らして、それにケルビムを織り出さなければならない。

26:3 五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、もう五枚の幕も互いにつなぎ合わせる。

26:5 その一枚の幕に五十個の輪を付け、もう一つにつなぎ合わせた幕の端にも五十個の輪を付け、その輪を互いに**向かい合わせにする**。

26:6 金の留め金を五十個作り、その留め金で幕を互いにつなぎ合わせ、こうして一つの幕屋にする。

これは「幕屋」、かつてエジプトの奴隷であったイスラエルの民を、神が預言者モーセを通して解放し、そして民に命じて造らせた簡易の神殿についての記述の一部です。その屋根の部分となる幕は、このようにして造られ、ここで「向かい合わせにする」と訳されているのが聖書で最初のカーヴアルです。そして「こうして一つの幕屋にする。」と結論づけられているように、カーヴアルという言葉の意味を理解するには、この「幕屋」についての理解が必要なのです。旧約聖書、特にトラー、モーセ五書と呼ばれる創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記にはこれについての教え、情報が詳細に記されています。しかしイスラエルにとっての異邦人である私たちにとってこれらの記述は、どれも非常に理解しにくい、なかなか頭に入らないような情報ばかりです。それ以前にカルチャーショックで、今の時代の私たちとは文化的に違いすぎて「受け入れる」ことが困難なものばかりです。しかしこれらはすべてイエシュアを指し示したもののなのです。イエシュアご自身こうっておられます。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

5:46 もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。

つまり私たちが「幕屋」をはじめとする、神によって「モーセが書いた」イスラエルに対する数々の記述や教えを理解していないということは、私たちはイエシュアについて、この御方がどのような御方で何をなさるのかということはまだほとんど理解していないということなのです。そればかりか異教の文化や教えが入り交じり、多くの誤解が生じているのです。ですから私たちはもっともっとイエシュアについて知らなければならないのです。

しかし、だからと言ってイエシュアについての知識が浅い者、勉強不足な者は「神の国」に入れない、救われないということではありません。あくまで救いは神の御心による選びであり、その人の外見や能力などとは一切関係ありません。無学で幼い子どもたちを指してイエシュアが言っておられるのが何よりの証拠です。逆に人間的に賢い者、強い者とされている人の方が「神の国」から遠いのです。ですからイエシュアをよく理解した者が「神の国」に入るのではなく、「神の国」に入った者がイエシュアを完全に知る者となるということであり、こう記されているとおりです。

コリント人への手紙 I【新改訳 2017】

13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見るようになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。

ですから私たちはやがて「神の国」に入るならば、イエシュアを「完全に知るようになります」すなわち幕屋をはじめとするイスラエルに対する神の教えや戒めについて学ぶことになります。それがどのような結果をもたらすかが、次のイエシュアの行為に表されています。

6. 祝福

マルコの福音書【新改訳 2017】

10:16 そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。

イエシュアは「子どもたちを抱き…」とあります。ハーヴァク(אֲבָקָה)という言葉が使われており、その最初の言及は以下の出来事です。

創世記【新改訳 2017】

29:13 ラバンは妹の子ヤコブのことを聞くとすぐ、彼を迎えに走って行って、彼を抱きしめて口づけした。そして彼を自分の家に連れて帰った。ヤコブはラバンに事の次第をすべて話した。

29:14 ラバンは彼に「あなたは本当に私の骨肉だ」と言った。

ラバンは「妹の子ヤコブ」すなわちアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルを「抱きしめて」とあり、ここに聖書で最初のハーヴァクが使われています。彼はイスラエルを「自分の家に」迎え入れ、「あなたは本当に私の骨肉だ」とまで言い、一つの家族であると宣言しました。このようにハーヴァクには本来、イスラエルを受け入れ一つの家族となるという意味合いがあると考えられ、イエシュアはみもとに引き寄せた子どもたちをハーヴァク「抱き」、イスラエルを受け入れる、すなわちイスラエルの民に対して神が語られた数々の教えや戒めを受け入れることの重要性、必要性を表されたのだと考えられます。そして子どもたちの「上に手を置いて祝福され」ました。上から、天の神からの祝福は、イスラエルを受け入れる者に注がれるのです。

創世記【新改訳 2017】

28:13 …見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのようになり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

イエシュアが指し示した「神の国」とはイスラエルに対するこの約束、神のご計画が成就、実現することなのです。それはこのようにイスラエルによって「地のすべての部族は…祝福される」という世界です。

ではその「祝福」神の祝福とは一体何でしょうか。実際にどのような状況を指すのでしょうか。ヘブル語で「祝福する」バーラフ(בָּרַךְ)とは本来、増えること、満ちあふれることを意味します(創世記 1:22)。かつて神は数えきれないほどの天の星々を指して、イスラエルの父祖アブラハムに「あなたの子孫は、このようになる。」(創世記 15:5)と言われました。そしてヨハネの黙示録にはこのように預言されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:14 …この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。

7:15 それゆえ、彼らは神の御座の前において、昼も夜もその神殿で神に仕えている。御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られる。

7:16 彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない。

7:17 御座の中央におられる子羊が彼らを牧し、いのちの水の泉に導かれる。また、神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」

この「すべての国民、部族、民族、言語から」神に選ばれ、「子羊の血」イエシュアの十字架の死によって罪を贖われ、その御前に呼び集められた「だれも数えきれないほどの大勢の群衆」こそが、神の祝福の究極的な現れであると考えられます。神の祝福の対象は、その目は初めから常に人、私たち人類にのみ向けられているのです。他の生き物や植物、またその住まいとしての場所や空間などは、人の存在に比べればその飾りにしかすぎないのです。「神の国」とは土地や建物のことではなく、その国の民、人々を指すのです。

やがて私たちは、ここに記されているとおりに「神の御座の前において、昼も夜もその神殿で神に仕え」ることになります。私たちは「もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどんな炎熱」にも襲われることはなくなります。イエシュアは私たちを「いのちの水の泉に導かれ」ます。つまり永遠に生きるのです。また私たちの「目から涙をことごとくぬぐい取ってくださ」り、「もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しきもない（黙示録 21:4）」世界となります。この事実、この約束、この神のご計画こそが福音であり、「だれも数えきれないほどの」神の祝福の、その完全な現れです。あなたはこれを信じますか。信じる者は「アーメン」と言いましょう。信じる者にこの神の「祝福」が与えられますように。